

〔研究ノート〕

芥川旧蔵書から（１）芥川龍之介とバートン版
『千夜一夜物語』について

澤 西 祐 典

1. はじめに

日本近代文学館に所蔵されている芥川龍之介の旧蔵書（芥川文庫）に見られる *The Book of the Thousand Nights and a Night 17vols.*（全17巻、Burton Club, 出版年未詳、請求記号【A614-1】から【A614-17】）について調査を行ったので報告する。芥川が所有していたのは、いわゆるバートン版『千夜一夜物語』で、1,000部限定の Limited Edition である。芥川の随筆「リチャード・バートン訳「一千一夜物語」に就いて」（『書物往来』1924・5・5～8・20）には、次のような記述がある。

バートンの訳本の表題は左の通り。

A PLAIN AND LITERAL TRANSLATION OF THE ARABIAN
NIGHTS ENTERTAINMENTS, NOW ENTITLED THE BOOK
OF THE THOUSAND NIGHTS AND A NIGHT WITH
INTRODUCTION EXPLANATORY NOTES ON THE
MANNERS AND CUSTOMS OF MOSELM MEN AND A
TERMINAL ESSAY UPON THE HISTORY OF THE NIGHTS

BY RICHARD F. BURTON.

巻数は補遺共十七冊で、出版社はバアトン倶楽部、一八八五年から一八八八年へかけて刊行されてゐる。

芥川文庫にある見られる *The Book of the Thousand Nights and a Night* 17vols. の第一巻から第十巻は、随筆の通りの表題である。また、巻数・出版社も同一であることから、ここで紹介されているのが、本書であると考えて、まず間違いなからう。芥川は同書の買値について、「価は小生は友人に頼み上海の古本屋より送らせ候へば運賃とも百五十円にてすみ候」うと述べている（1924年7月13日付け藤倉浩吉宛て書簡【1299】）が、同書第一巻の表見返しには、古書店が記入したと思しき「150.00 / 17vols」と読める筆記がある。

1,000部限定版のため、各巻に通し番号が附されているが、番号は不揃いで、各巻、次のとおりである。

vol.1=No.137, vol.2=No.157, vol.3=No.163, vol.4=No.168, vol.5=No.137,
vol.6=No.137, vol.7=No.163, vol.8=No.163, vol.9=No.137, vol.10=No.157,
vol.11=No.137, vol.12=No.163, vol.13=No.157, vol.14=No.161, vol.15=No.157,
vol.16=No.161, vol.17=No.157

数が多い順でいえば No.137（5冊）と No.157（5冊）が最も多く、No.163（4冊）、No.161冊（2冊）、No.168（1冊）、と続く。芥川が随筆で「バアトンの「一千一夜物語」十七巻の中、七巻は補遺である」と触れている通り、全17巻

中、物語本編は第10巻まで（表題前出）であり、第11巻以降は補遺（*Supplemental Nights to the Book of the Thousand Nights and a Night, Notes Anthropological and Explanatory*）となっている。芥川旧蔵書には未裁断箇所があったが、該当箇所はすべて各巻の末にある Index 部分⁽¹⁾である。また、第14巻の388頁（“Ali Baba and the Forty Thieves”章の“The end of the Six Hundred and Thirty-third Night”）のページ左下が折られていた。

2. 随筆について

「リチャード・バアトン訳「一千一夜物語」に就いて」（前出）は、神代種亮・石川巖編集の書物にまつわる随筆雑誌『書物往来』に連載され、創刊号（1924年5月5日）、第2冊（同年6月30日）、第3冊（同年8月20日）と三回にわたって連載されたが、未完に終わっている。内容は「千夜一夜物語」の翻訳状況やバアトン訳の成立の経緯、バアトン版の魅力などについてである。

『芥川龍之介全作品事典』（勉誠出版、2000）の同随筆についての項目で、須田千里は「本作の内容は、バアトンの序文の前半を適宜要約したものと言ってよい」と述べている。須田の指摘の通り、ガラン版をはじめとした「一千一夜物語」の翻訳状況について記された第一回の内容は、おおむね、バアトン版の第一巻に収録されている“The Bibliography of the Book and its Reviewers Reviewed”に負っている。たとえば、

先づ「一千一夜物語」を欧羅巴に紹介した最初の訳本は一七〇四年に出たアントアン・ガラン（Antoine Galland）教授の仏訳本である。これは

勿論完訳ではない。ただ甚だ愛誦するに足る抄訳本と云ふ位のものである。ガラン以後にも手近い所でフオスタア (Foster) だとかブツセイ (Bussey) だとかいろいろ訳本の無い訳ではない。併し何れも訳語や文体は仏蘭西臭味を漂はせた、まづ少年読物と云ふ水準を越えないものばかりである。

とある部分は、訳者序文 (The Translator's Foreword) の x 頁から xi 頁にある次の記述の全訳に近い。

Our century of translations, popular and vernacular, from (Professor Antoine) Galland's delightful abbreviation and adaptation (A.D. 1704), in no wise represent the eastern original. The best and latest, the Rev. Mr. Foster's, which is diffuse and verbose, and Mr. G. Moir Bussey's, which is a re-correction, abound in gallicisms of style and idiom ; and one and all degrade a chef- d'oeuvre of the highest anthropological and ethnographical interest and importance to a mere fairy-book, a nice present for little boys.

その後に登場する「トレンズの訳本」「レーンの訳本」「ペーンの訳本」などに関する記述も、バートンの「訳者序文」からの手際のよい要約である。ただし、「レーンの訳本——日本へは最も広く流布してゐる。殊にボーン (Bohn) 叢書の二巻ものは、本郷や神田の古本屋でよく見受けられる」といった当時の日本での流通事情や、「バアトンの訳本も、一千部の限定出版で、容易に手に

入り難い。出版当時十ポンドであつたものが、今日では三十ポンド内外の市価を唱へられてゐるのは、「一千一夜物語」愛好者の為に聊か気の毒である。尤も此のバアトン訳の剽窃版 (Pirate Edition) が亜米利加で幾つも出来てゐるが、中身は何うだらうか」といった海賊版への言及などは、芥川独自の見識だろう。John Payne に関する「ペーン——フランソワ・ヴィヨン (François Villon) の詩を英訳した——」という補足については、芥川旧蔵書に、John Payne によるフランソワ・ヴィヨンの英訳詩集 *Poems* (The Modern Library シリーズ, New York, Boni and Liveright, 出版年不明) が含まれており、下線や傍線も見られる⁽²⁾ ことから、一見すると芥川の見解と思えるが、やはりバートンの訳者序文に記述がある部分である。

続く第二回掲載分の冒頭では、芥川自身「バートンの訳本の成り立ちは、第一巻の「訳者の序言」と第十一巻の「一千一夜物語の伝記並に其の批評者の批評」とに収められて居る」と証言している。また、読者からの質問への返答である 1924 年 7 月 13 日付け藤倉浩吉宛て書簡 (前出) では、「同書第十七巻の The Bibliography of Book Reviewers Reviewed」を参照している。芥川文庫のバートン版第 17 巻に“The Bibliography of the Book and its Reviewers Reviewed”が見えることから、随筆で登場する「第十一巻の「一千一夜物語の伝記並に其の批評者の批評」と、書簡に見える「同書第十七巻の The Bibliography of Book Reviewers Reviewed」は、同一の記事を指すと考えられる。つまり、随筆の「第十一巻」は「第十七巻」の誤植で、書簡に見られる英語タイトルは誤記と目される。

第二回の内容は、前半は訳者の序文に、後半が「一千一夜物語の伝記並に其の批評者の批評 (“The Bibliography of the Book and its Reviewers Reviewed”)

に負っている。順にみていくと、

抑もバアトンが此の翻訳を思ひ立つたのは、アデン在留の医師ジョン・スタインホイザアと一緒に、メヂヤ、メツカを旅行した時のことで、バアトンが第一巻を此のスタインホイザアに献じてゐるのを以て視ても、二人の道中話がどんなであつたかは分る。

其の旅行は一八五二年の冬のことで、其の途中で、バアトンはスタインホイザアと亜刺比亜のことをいろいろ話してゐる中に、おのづと話題が「一千一夜物語」に移つて行つて、とうとう二人の口から、「一千一夜物語」は子供の間知れ渡つてゐるにも拘はらず本当の値打が僅かに亜刺比亜語学者にしか認められてゐないと云ふ感慨が洩れて出た。それから話が一步進んで、何うしても完全な翻訳が出したいと云ふことに纏まり、スタインホイザアが散文を、バアトンが韻文を訳出する筈に決して、別れた。

という部分は、訳者序文にある次の記述の要約といえるだろう。

It may be permitted me also to note that this translation is a natural outcome of my Pilgrimage to Al-Medinah and Meccah. Arriving at Aden in the (so-called) winter of 1852, I put up with my old and dear friend, Steinhæuser, to whose memory this volume is inscribed ; and, when talking over Arabia and the Arabs, we at once came to the

same conclusion that, while the name of this wondrous treasury of Moslem folk-lore is familiar to almost every English child, no general reader is aware of the valuables it contains, nor indeed will the door open to any but Arabists. Before parting we agreed to “collaborate” and produce a full, complete, unvarnished, uncastrated copy of the great original, my friend taking the prose and I the metrical part ; and we corresponded upon the subject for years. But whilst I was in the Brazil, Steinhæuser died suddenly of apoplexy at Berne in Switzerland and, after the fashion of Anglo-India, his valuable MSS. left at Aden were dispersed, and very little of his labours came into my hands.

また、「他人目には何うか知らないけれども、自分では何よりの慰藉と満足との泉であつた」というのは、序文冒頭の“*This work, laborious as it may appear, has been to me a labour of love, an unfailing source of solace and satisfaction.*”という証言を指すのだろう。しかし、「バアトンが又続けて言つて居る。『東部亞弗利加のゼイラに二箇月間滞在してゐた時にも、ソマリイを横断の陣中でも、此の「一千一夜」が何の位自分を慰めて呉れたか解らない』と」という段落からは、訳者の序文でなく、「一千一夜物語の伝記並に其の批評者の批評（“*The Bibliography of the Book and its Reviewers Reviewed*”）」からの抜粋・要約であろう。たとえば上に引用した一文に適合するのは、388頁の記述である（傍線は引用者、以下同様）。

The romantic and exceptional circumstances under which my large labour was projected and determined have been sufficiently scribed in the Foreword (vol. i. pp. vi-ix). I may here add that during a longsome obligatory halt of some two months at East African Zayla' and throughout a difficult and dangerous march across the murderous Somali country upon Harar-Gay, then the Tinbukhtu of Eastern Africa, *The Nights* rendered me the best of service.

そのほか、詳しくは列記しないが、随筆に書かれている出版部数と値段に関するせめぎ合いについても、同記事内の“The Engineering of the Work (「出版までの画策」)”内の390頁から395頁までの記述を参照したのだろう。

最終回となった第三回にて、物語本編の最終巻である第10巻に付された“Terminal Essay (あとがき)”について、「此の物語の起源、亜刺比亜の風俗、欧羅巴に於ける訳本等が詳しく討究されてゐる」と紹介したあと、芥川はいよいよ「千夜一夜」の具体的な内容や魅力についての紹介をはじめ。

バアトンは本文を、一話一話に分けないで、原文通り一夜一夜に別けてゐる。又、韻文は散文とせずに韻文に訳出してゐる。之を以て観てもバアトンが如何に原文に忠実であつたかは推察出来ると思ふ。

例へば、亜刺比亜人の形容を其儘翻訳して居るのに非常に面白いものがある。男女の抱擁を「釦が釦の孔に嵌まるやうに一緒になつた」と叙してある如き其の一つである。又、バクダッドの宮室庭園を写した

文章の如きは、微に入り細を穿つて居つて、光景見るが如きものがある。第三十六夜（第二巻）の話にある Harun al-Ra shid^(ママ)の庭園の描写などは其の好例である。

「男女の抱擁を『釦が釦の孔に嵌まるやうに一緒になつた』と叙してある」は、『芥川龍之介全集 第十一巻』（岩波書店、一九九六）の注解で篠崎美生子が「第一話所収」と指摘している通り、第一夜にある“then he bussed her and winding his legs round hers, as a button-loop clasps a button, he threw her and enjoyed her.” のことである。

また、描写の微に入り、細を穿った描写について「第三十六夜（第二巻）の話にある Harun al-Rashid の庭園の描写などは其の好例である」と言及があるが、芥川旧蔵書の当該箇所・第2巻21頁20行目から27頁の末行（第37夜途中）まで、ページをまたぐ形で、黒鉛筆の傍線が引かれている。そして、傍線の終わる27頁には、黒鉛筆で「未ダカカル文章ノ天下ニアルヲ知ラズ」と書入れがなされている。該当箇所は、異国に逃れた Nur al-Din と妻の Anis al-Jalis が、庭番の Shaykh Ibrahim に導かれて、「喜びの園（the Garden of Gladness）」と呼ばれる Harun al-Rashid⁽³⁾ の庭園で憩う場面である。庭園の描写部分は次の通りである。

So Nur al-Din thanked him and rose, he and the damsel, and followed him into the garden ; and lo ! it was a garden, and what a garden ! The gate was arched like a great hall and over walls and roof ramped vines

with grapes of many colours ; the red like rubies and the black like ebonies ; and beyond it lay a bower of trelliced boughs growing fruits single and composite, and small birds on branches sang with melodious recite, and the thousand-noted nightingale shrilled with her varied shrigh ; the turtle with her cooing filled the site ; the blackbird whistled like human wight and the ring-dove moaned like a drinker in grievous plight. The trees grew in perfection all edible growths and fruited all manner fruits which in pairs were bipartite ; with the camphor-apricot, the almond-apricot and the apricot "Khorasani" hight ; the plum, like the face of beauty, smooth and bright ; the cherry that makes teeth shine clear by her sleight, and the fig of three colours, green, purple and white. There also blossomed the violet as it were sulphur on fire by night ; the orange with buds like pink coral and marguerite ; the rose whose redness gars the loveliest cheeks blush with despight ; and myrtle and gilliflower and lavender with the blood-red anemone from Nu'uman hight. The leaves were all gemmed with tears the clouds had dight ; the chamomile smiled showing teeth that bite, and Narcissus with his negro eyes fixed on Rose his sight ; the citrons shone with fruits embowled and the lemons like balls of gold ; earth was carpeted with flowers tintured infinite ; for Spring was come brightening the place with joy and delight ; and the streams ran ringing, to the birds' gay singing, while the rustling breeze upspringing attempered the air to

temperance exquisite.

(訳⁽⁴⁾): それで、ヌル・アル・デインは老人にお礼をいうと、立ちあがってアル・ジャリスの手をとって園へついてゆきました。それは、まあ、実に見事な庭園でございました! 門は大広間のように^{はこもち}迫持になっていて壁や屋根には色とりどりの葡萄の実をつけた蔓が一面に生い繁っていました。赤い実はルビーのようで、黒いのは黒檀にまがうばかりです。門の向うには、枝を四つ^{たな}目^{ちん}柵にした亭があって、ただ一つぶら下っている果物もあれば、塊まってぶら下っている果物もありました。小鳥は枝にとまって美しい鳴声で^{うぐいす}囀り、夜鶯は千変万化の音色を出して声高くうたい、山鳩のくーくーという鳴声もあたりをみたしていました。また、^{つぐみ}つぐみはまるで人間の口笛のようにぴーぴーと鳴き、白子鳩は酔いどれさながらの呻き声を立てました。木々はすっかりうれた実をつけていましたが、その種類はさまざまで、どの実も二つずつ^{つい}対になって分かれていました。樟^{あんず}脳杏もあれば、^{はたんきょう}巴旦杏もあり、また「ホラサニ」と呼ぶ杏や、美人の顔のようにすべすべと輝いた^{すもも}李もありました。それにまた、歯を白くする効能のある^{さくらんぼ}桜桃も、緑と紫と白の^{みいろ}三色の^{いちじく}無花果もございました。^{すみれ}すみれは暗がりに燃える硫黄のように咲きみだれ、蜜柑は桃色の珊瑚か雛菊かともいいたい蕾をつけていました。真紅の花をつけてどんな美しい^{はじ}頬も^{はじ}羞らはせないではおかない^{すみれ}薔薇も、^{てんにくくわも}てんにくくわも、^{あらせいとうも}あらせいとうも、ラヴェンデルも、ヌウマン王の名をとって名づけられた真紅のアネモネといっしょに、今をさかりと咲きみだれておりました。木の葉は雲からおちた涙の雫で宝玉をちりばめたように見え、^{かみつれ}かみつれは真白い歯並みをのぞかせて微笑み、水仙

は薔薇をみつめた黒ん坊の眸ひとみのようでございました。またシトロンははちきれそうな実をつけて輝き、レモンは黄金の玉にまがうばかりに思われました。大地は一面、色とりどりの花褥しとねで掩われ、春の訪れにそこら一帯は喜びにあふれて燦然と輝き渡っていました。小川は小鳥の陽気な唄声に調子をあわせてさらさらと流れ、そよ風はさわやかな音を立てて、大気をなごやかにやわらせていたのでございます。)

オスカー・ワイルドの「わがままな巨人 (Selfish Giant)」の庭園を想起させるような唯美主義的で、かつ豊饒な語彙と滑らかな筆致で描かれた園は、まさに「微に入り細を穿つて居つて、光景見るが如き」である。芥川自身、「景色が visualize (眼に見るやうに) されて来る文章が好きだ」(「眼に見るやうな文章」、『文章倶楽部』1918年5月)と公言しているが、その好例と言える描写である。「未ダカカル文章ノ天下ニアルヲ知ラズ」と書き記したところに芥川の感動がじかに宿っていると見える。また、芥川をしてバートン版を「優雅なる所もありつまり俗書よりもよほど忠実に訳し居るものなるべく 小生は英吉利語にて読み得らるる千一夜物語中最上のものと信じ居り候」と言わしめた事由の一つと考えられる。

3. 芥川の「千夜一夜物語」観の変遷と随筆中断の背景

ところで、芥川の「千夜一夜物語」への関心は早くからあったことで知られる。「絶島之怪事」(『流星叢書』1906年5月)には「オイなんだらう？ 此箱は！ 事によるとアラビアンナイトの漁夫物語中にある大魔神のようなものが飛出す

かも知れないぜ」という台詞が登場し、1915年のものと推定される久米正雄宛て書簡には、風邪をひいて「アラビアンナイトの翻訳が出来さうもない」と記されている。また、「魔術」（『赤い鳥』1920年1月）には「ゼンなどといふ精霊があると思つたのは、もう何百年も昔のことです。アラビヤ夜話の時代のことでも言ひませうか」という魔術師ミスラの台詞がある。「三つの指輪」（『體性』1922年5月）では「千夜一夜物語」が御伽噺として再話⁽⁵⁾されている。また、座談会「家庭に於ける文芸書の選択に就いて」（『新潮』1923年11月）では、「僕は実験的に子供に西洋のクラシックを話して聞かせたことがあるのですが、大抵の子供は面白がりますね。『ドンキホーテ』とか、『アラビアンナイト』なんか喜ぶますね。イリヤッドなども好きますね」と述べている。芥川にとって、「千夜一夜物語（アラビアンナイト）」が子供の喜ぶ、魔術的なおとぎ話の世界として捉えられている節がある。

しかし、新潮座談会から間もない、翌1924年1月にバートン版「千夜一夜物語」を入手した⁽⁶⁾ことで、芥川の「千夜一夜物語」理解は一変したと考えられる。なぜなら、随筆「リチャード・バアトン訳「一千一夜物語」に就いて」（前出）で、芥川がバートン版の魅力として力説したのは男女の営みのあけすけな描写であったからだ。

バアトンは又基督教的道徳に煩はされずして、大胆率直に東洋的享樂主義を是認した人で、随つて其の訳本も在来の英訳「一千一夜物語」とは甚だ趣を異にしてゐる。例へば、第二百十五夜（第三卷）にBuder女王の歌ふ詩に次の如きものがある。

The penis smooth and round was made with anus best to match it,
Had it been made for cunnus' sake it had been formed like hatchet!

併し概して言ふと、下がかつた事も、原文が無邪気に堂々と言ひ放つて
ゐるのを其儘訳出してあるから、近代の小説中に現はれる Love scene よ
りも淫褻の感を与へない。

この「第二百十五夜（第三巻）」とされる描写は、実際は第 216 夜に含まれ、単純な誤記と思われるが、「無邪気に堂々と」言い放たれる「Love Scene」に芥川は感服している。バートンによる訳者序文からの受け売りだとは言え、ガラン版などを「訳語や文体は仏蘭西臭味を漂はせた、まづ少年読物と云ふ水準を越えないもの」と評したのもむべなるかなと思わせられる。脚注で「黒人の男を情夫にする条の註」を挙げている点なども同様である。

さて、『書物往来』での連載だが、第三回に「(続出)」とありながら、「リチャード・バートン訳「一千一夜物語」に就いて」はこの回で終了してしまう。本稿内でも指適したが、誤記の多さ⁽⁷⁾が目立つことから入念準備をして臨んだというより、メ切にあわせてバートン版「千夜一夜物語」を読み進め、琴線に触れた事柄を順次読者に紹介していったような印象を受ける。この後もメ切ごとに同書をさらに読み進め、稿を書き継いでいく試みだったのであろう。しかしその試みは、読者（藤倉浩吉）からの問い合わせで同書が「剽窃版（Pirate Edition）」である可能性が浮上し、やむなく中止となったのであろう。

冠省 原稿紙にて御免蒙候 バアトンの千一夜物語は小生所蔵のものタイ
トルペエヂには バアトン・クラブと有之候へども 同書第十七巻の The
Bibliography of Book Reviewers Reviewed にはカアマストラ協会と有
之候 バアトン・クラブなるものはバアトン死後に設立せられしものにや
或は亜米利加の偽版を嗤へる小生の蔵書もやはり亜米利加の偽版なりしや

芥川は、随筆内で「此のバアトン訳の剽窃版 (Pirate Edition) が亜米利加
で幾つも出来てゐるが、中身は何うだらうか」と、千部限定のために入手困難
となって海賊版が横行している現状を横目に笑っていた。本来は (補遺の七巻
分の) 版元が「カアマストラ協会 (Kamashastra Society)」であるべきとこ
ろ、「バアトン・クラブ (Burton Club)」となっていることに気づき、偽書を
掴まされた可能性に思い至ったのだろう。自分が訓戒を垂れる立場にいるべき
でないと気がついた芥川が、連載を辞退したいことは想像に難くない。高価な
古書が贗物であったことは気の毒であるとともに、芥川がバートン版の魅力を
掘り下げる機会 (を公にすること) がなくなってしまったことは、残念でなら
ない。

最後に、芥川の遺書には、「一 他に貸せしもの、——鶴田君にアラビア夜
話十二巻あり」と記されている。国民文庫刊行会創業者の鶴田久作と目される
人物に貸した「アラビア夜話」について、須田 (前掲) は日本近代文学館に所
蔵されている芥川旧蔵書の「一部か」と類推している。しかし、芥川文庫は端
本はなく、第十二巻にも特に目立った汚れなどはなかった。また、芥川がバー
トン版を入手する以前に翻訳を試みようとしていたことや、「英吉利語にて読

み得られるる千一夜物語中最上のものと信じ居り候」と述べていることを考え合わせると、バートン版以外の英訳「千夜一夜物語」も所持していたと考えるのが自然であろう。そうしたことを鑑みると、「アラビア夜話十二巻」は「十二巻」という数字も相まって、ガラン版の十二巻だったのではないかと、とついつい考えたくなるが、ガラン版はフランス語であるから、ペイン版十二巻と考えるのが妥当だろうか。あるいは、ガラン版の英訳 *Arabian Nigts Entertainments* の十二巻本の可能性もなくはない。いずれにしろ、今少し想像を逞しくするならば、芥川が死してなお取り返そうとした愛蔵本『千夜一夜物語』の一揃いが、現在なお行方不明になっているのかもしれない。

注

- (1) 確認できた未裁断箇所は次の通り。vol.1=362-364 頁 [Index の最終頁]、vol.5=397-400 頁 [Index の冒頭]、Vol.7=377-380 頁 [Index 中] および 381-384 頁 [Index 中]、vol.16=493-496 頁 [Index 中]
- (2) 書き込みは次の通り。“Ballad of Good Doctrine to Those of Ill Life” の第 CLXV 連の “Roundel” に黒鉛筆で傍線 (186 頁)、“Ballad Crying All Folk Mercy” のタイトルに黒鉛筆で下線 (189 頁)、“Ballad, by Way of Ending” のタイトルに黒鉛筆で下線 (191 頁)、“The Epitaph in Ballad Form that Villon Made for Himself and His Companions, Expecting no Better than to be Hanged in Their Company” のタイトルに黒鉛筆で二重傍線 (197 頁)。
- (3) 『芥川龍之介全集』の注解では「正しくは Harun al Rashid」と指摘されているが、芥川旧蔵書のバートン版では「Harun al-Rashid」となっている。

- (4) 翻訳は大場正史『千夜一夜物語 第二巻』（山王書房、1950）を用い、旧字・旧仮名は適宜新字・新仮名に改めた。ルビも一部省力した。
- (5) 田端文士村記念館 30 周年記念展「古典期的作品の再現者 芥川龍之介「宇治拾遺物語」から「千夜一夜物語」まで」（2023 年 11 月 4 日から 2024 年 2 月 12 日）より。
- (6) 1924 年 1 月 11 日付の小穴隆一宛て書簡に「アラビヤ物語を買つたので今非常に貧乏なり」とある。
- (7) すでに本文中で指摘した点のほか、「バアトンの『一千一夜物語』十七巻」とすべきところを、「バアトンの『一千一夜物語』十八巻」としているなど、間違いが散見される。